

■まちづくりの方向性について

第2回町田市長期計画審議会（10月11日）に提出したまちづくりの方向性

資料6-1(1/2)

方向性1

- 子どもが育ちたいと思うようなまち
- 子どもがここで育ってよかったと思うまち
- 子どもを産み育てたいと思えるまち

方向性2

- 豊かな暮らしができるまち
- ちょうどいい楽しいまち
- 自分のライフにワクワクできるまち

方向性3

- まちがなんとなく家族のようなまち
- 人と人が手を取り合い地域をつくるまち
- 多様性を認め合えるまち

日本全体で人口減少が進む中、自治体間競争による人口の奪い合いでは根本的な解決になりません。日本の希望出生率は「1.8」と言われていますが、町田市を含めて多くの自治体で希望が叶っていない状態です。少子化対策は国がすべきものという考えではなく、行政サービスを提供している基礎自治体としても子育ての希望を叶える取組ができるはずで

町田市では、この問題に果敢に取組む先進的な自治体を目指すことを、まちづくりの方向性を考える起点として考えます。「子どもが育ちたいと思うようなまち、子どもが住んでよかったと思うまち、子どもを産み育てたいと思えるまち」が実現するためには、お互いを信頼できる社会や幸せを感じられる社会が必要だと考えられます。

幸福感や信頼感の高い社会をつくることにより、出生数が増え、更にそこに人が集まり社会増にもつながります。

AIやICTなどのテクノロジーの発展により仕事のあり方や仕事の仕方が大きく変わることが考えられます。

仕事をする観点からは、町田市内で仕事をする価値を提供することにより、市内に働く場所を集積させるなど、多様な働き方を実現できます。今後、共働き世帯が当たり前となる状況も考えると、職住近接という生活圏に近いところで仕事ができることが大切になります。

そして、仕事以外の時間である自分の時間への対応も必要です。まちにある緑に親しめる、地域で様々なイベントがある、誰かのために活動をする、そこへの交通アクセスが充実しているなど、暮らしを豊かに楽しくできるようなちょうどいい環境が多くの人を惹きつけます。

町田市を、仕事や仕事以外の時間を楽しめ、ワクワクできるまちとすること。このことをまちづくりの方向性と考えます。

町田市においては、「まちだ〇ごと大作戦18-20」のような地域でつながりが生まれる取組が進み、実際、多くのつながりが誕生しています。

人や地域のつながりは、子どもから大人まで多くの人を支えやすく包み込んでくれます。それは、つながりを苦手とする人に対しても、何かあったときには支え合いの中に迎えられるものであり、そうしたなんとなく家族のようなつながりが人口減少時代におけるまちの魅力の一つになることが考えられます。

そして、地域の人が自分たちの地域に必要なことを一緒に考えて、地域資源の使い方を含めて地域をつくり続けることが、地域のつながりを一層強くすると考えられます。

このような、なんとなく家族のような温かい人と人とのつながりが感じられる昔懐かしいまちの姿を目指し、継続させることをまちづくりの方向性と考えます。

第2回町田市長期計画審議会（10月11日）での意見

方向性1について

- ・子どもと一緒に大人というか、まちも一緒に育っていくというイメージ。(三輪)
- ・最初に少子化に対応ということを出すのは非常によいが、もう一方の高齢化にどう対応していくのかというのが、ちょっと今の文言からは読み取れない。(大野)
- ・ここでなら子育てできるとして定住し、2人目、3人目を生もうかと思うことで、自然増を増やしていくみたいな。周りのコミュニティや親族など、福祉的なサポートがあるという意味でいうと、キーワード的には「子どもを産み育てる」の方を思い切って強くするという手もある。(三輪)

方向性2について

- ・「ちょうどいい」はキャッチー的な感じになるけど、少し抽象的な表現をどう捉えて、ここに入れていくか。(小林)
- ・文言の奥に、町田の特性みたいなものがほしい。町田は若者が多いので、若い人が頑張れるまちとか、その先にあるものがわかる文言が入るといい。(深澤)
- ・町田に住んでなくても、町田を拠点にして中心市街地とかでみんな活動したり、活躍したりということもある。(大野)

方向性3について

- ・2040年を見据えたときに、多様性を認め合えることは、もう当たり前になっている。多様性を認め合い、それぞれ誰もが力を発揮できるというところが必要になる。(小林)
- ・地域への愛着が、町田市に生涯にわたって安心して住み続けられるまちという意味であると思う。(芳賀)
- ・認知症になっても安心して暮らせるまち。つまり周りの人がみんな見てくれているまち。(芳賀)
- ・安全、安心なまちづくり、治安の面にいかに力を入れて、市と一体的に取り組んでいくか。(安達)

方向性全般について

- ・未来予測をしっかりしないと難しい時代。町が本当に残っているのかどうかという瀬戸際ぐらいの危機感を持つべき。(清原)
- ・少し人ごとっぽい。これを読んだ市民が自分ごとにしていくようなアクションを呼びかけるほうがいい。(三輪)
- ・各方向性で挙がっている三つの黒丸が、それぞれ1個の目指すべき姿になると、各論が最初に来ているような感じがするので、これをまとめて、目指すべき方向としては1本の文言でいい。(芳賀)
- ・例えば、優しいまちになりたいのか、優しいまちだけだとそれを持続したいのかとか、少し丁寧に書いたほうが、市民にとっても分かりやすいビジョンになる。(清原)

2040年に向かって、町田市のなりたいまちの姿や行政経営のあり方を描くためには、市を取り巻く社会経済状況の変化を好機ととらえ、市の特性を生かしながら、まちづくりや行政経営の進むべき方向を明らかにする必要があります。

これまでの町田市のまちづくりは、暮らす人、働く人、訪れる人など、多くの「人」によって支えられてきました。そして、それはこれからも変わらないことであり、多様であることが当たり前の社会においては、一人ひとり生き方の違う「人」が、それぞれのライフステージにおいて活躍できる環境があることがより重要になってきます。このことを踏まえ、誰もが夢を持ち、その夢を実現できるまち、一人ひとりが輝けるまちとなるため、町田市が考えるまちづくりの方向性と行政経営の方向性を以下のように整理します。

1 子どもと共に、みんなが成長していくことができる

人口減少という課題に直面する中、2019年度に行った調査では、町田市の希望出生率は1.91という結果が出ています。これに対して合計特殊出生率は1.26前後を推移していることから、子どもを産み育てたいと考える人たちの希望が叶っていない状態にあるといえます。

また、将来的にも人口減少が続くことが推計で示されていることから、これから先、町田市は行政サービスを提供している基礎自治体として少子化対策に取り組み、**子育ての希望を叶えていく**必要があります。

町田市で子どもを産み育てていきたい、また、2人目、3人目をもうけたいと思えるためには、子育てへの不安を払拭できるような、**お互いを信頼でき、幸せを感じられる社会であること**が求められます。様々な支援があり、ここでなら安心して子どもを産むことができる、子どもが健やかに成長していくという確信が持てる社会であれば、自ずと出生数は増えていきます。

また、子どもの周りに、こうなりたいと思えるような素敵な大人がいることや、自分に関係するまちづくりに参加できることなどが、**子ども自身がここで育っていきたくて、育ってよかったと思えること**につながり、将来の転出抑制、転入促進にもつながっていきます。

人口減少時代にあっては、このように、**大人も子どもも未来への希望が持てること**、このことを大事にしていく必要があります。

これから先、町田市が持続可能なまちであるためには、少子化という問題を避けては通れません。このことに果敢に取り組む姿勢を示すとともに、町田市で生まれ育った子どもたちに次代の町田市をつくってほしいという願いを込め、(仮称)まちだ未来づくりビジョン2040では、「子ども」を起点に、まちづくりの方向性を考えていきます。

子どもにやさしいまちは、みんなにやさしいまちです。町田市は2040年に向け、**親や祖父母、地域など、子どもを取り巻く様々な主体が、子どもと共に成長し幸せになっていくことができる**まちづくりを進めます。

含まれる要素

- ・子どもを産み育てる希望を叶える
- ・少子化対策
- ・社会への信頼度を上げる
- ・地域全体の幸福度を上げる
- ・子育て支援
- ・出生数の増加

- ・生産年齢層、高齢者層の支援
- ・子どもにやさしいまちづくり(CFCI)
- ・転出抑制、転入促進
- ・持続可能なまちづくり
- ・気候変動への対応

2 ちょっといい環境の中で、ちょっといい暮らしができる

2040年を見据えたとき、AIやICTに代表されるテクノロジーの更なる発展、一億総活躍社会の実現に伴う働き手の多様化など、私たちの日々の暮らしや仕事のあり方は今とは大きく異なっていることが予想されます。

時間や場所などにとらわれないライフスタイルが前提となったとき、生活の拠点として町田市が選ばれていくためには、**人を惹きつける価値を提供できる**まちである必要があります。

長く都心のベッドタウンとして人々の生活を支えてきた町田市が提供できる価値を考えたとき、それは特別な何かではなく、居心地のよさや気楽さ、**ちょっとよさを感じられる日常**というものではないでしょうか。

日常の中にあるといちようによさは、例えば、働くということにおいてであれば、サテライトオフィスやコワーキングスペースなど、近くに働ける場所やビジネスパートナーを見つけられる場所がある、どこかへ出向く際は快適に移動できる交通基盤がある、仕事帰りに買い物や食事を楽しめる魅力的なお店があるなど、**周辺都市よりちょっといい環境がある**ということが挙げられるかと思えます。

一方、働き方の変化などによってもたらされる仕事以外の時間、言うなれば自分の時間をどのように充実させるかということも非常に重要です。この点では、みどりを身近に感じることができる、各地域で面白いイベントがたくさんある、誰かのために活動する機会を得ることができる、それらへの交通アクセスが充実しているなど、**暮らしを豊かにする物事が周りにたくさんあり、また、それを思い立ったときにすぐ実行できる、ちょっとよく手に入る**ということが大事になってきます。

都心から程近く、都市機能と自然環境が共存し、広域交通にも恵まれている町田市は、仕事の時間や自分の時間の過ごし方の選択肢がたくさんあり、それぞれにちょっといい暮らし方を選べるまちです。

2040年に向け、このポテンシャルを更に引き出し、**住む人、働く人、更には近隣に暮らす人たちまでもがワクワクできる、職住近接に暮らしの楽しさをプラスした生活の拠点となるようなまちづくりを進めます。**

含まれる要素

- ・テクノロジーの発展
- ・女性、高齢者などの就業率上昇(働き手の多様化)
- ・町田の特色
- ・働く場の創出
- ・交通基盤強化

- ・職住近接にプラスα
- ・就労・創業支援
- ・産業振興、農業振興、観光振興
- ・北部丘陵等の豊かな自然環境
- ・気候変動への対応
- ・市民協働
- ・他都市からの流入促進

3 なんとなく家族のようにつながりながら、多様な地域をつくることできる

私たちの暮らす社会は、子どもから高齢者まで、多くの方が支え合うことで成り立っており、2040年になってもそれは変わらないでしょう。誰もがかつては子どもであり、年を取れば高齢者になります。

支える側と支えられる側のどちらにもなり得ることを思えば、自然と支え合いができていく、家族のようなつながりがいつの時代も求められているといえます。とはいえ、家族のかたちやあり方は時代とともに変化していくものでもあるため、その機能をまちが担い、**みんながなんとなく家族のようにつながることができれば**、それは人口減少時代の魅力の一つとなり得ます。

性別、年齢、国籍などの違いに加え、生き方や信条、住まい方の違い、あるいは、地域と積極的に関わっている人、そうでない人など、町田市には様々な人が暮らしています。**お互いを認め合い、地域とのつながり方を選びながら、それぞれの持てる力を発揮できる**、そんな地域であれば、生涯住み続けたいと思える愛着が生まれるのではないのでしょうか。

更に、**多様な人たちが、多様な考え方の下、地域資源の使い方や安心・安全への取組など、自分たちで必要なことを考えて地域をつくり続けていく**ことができれば、地域に化学反応を起こせるとともに、まちへの誇りや責任を持つことにもつながると考えられます。

多様性を認め合うことが当たり前の時代にあっては、地域にも多様なあり方があって然るべきであり、そこから新たな価値が生まれてくるはずです。

2040年に向け、このように、**温かい人と人とのつながりがあり、どこか懐かしいけど新しさも感じる**、そんなまちづくりを進めます。

含まれる要素

- ・まちが家族する
- ・高齢者支援、子育て支援、障がい者支援
- ・元気高齢者の活躍
- ・防災安全
- ・気候変動への対応

- ・多様性を認め合う
- ・地域への愛着醸成
- ・市民協働
- ・住民自治の推進
- ・地域への権限移譲
- ・地域への誇りや責任の醸成
- ・多様性に基づく新たな価値の創出